

# 冬の十勝の家畜管理

— 90年度冬季現地研究会参加報告 —

佐藤 義和

(北海道農業試験場)

「こないだ息子たちが富良野にスキーに行ってきたけど、雪が満足になかったみたいですよ。」列車で隣合わせたおばさんがいっている。窓からみえる夕張あたりの景色は、季節を取り違えるほどだ。山にほとんど雪がなく、笹がうららかな陽をあびてしげってるようすには晩秋の雰囲気さえある。暮れから1月にかけてはほとんどに雪の降らない、そして暖かい冬だった。スキー場にも何度か出かけたが、定山溪の国際とニセコの比羅布以外にはまともに雪が積もってなかった。今シーズン、ホテルとキャビンの新設したMt. レースイはどうしていることやら。旭川にも積もってないというし、岩見沢にも滝川にもない。滝川では畜舎の排熱を利用した融雪の実験をやっているのに。これから行く十勝には十日ばかり前に記録的な大雪が降っている。へんな冬だ。

最近架けられたサスペンション構造の十勝中央大橋のシルエットが闇に浮かんでいる。夕方には盛んに鳴いていた白鳥はもう眠ってしまったようだ。この研究会は現地見学の前夜に酒を飲んでしまう。集合してすぐに、この研究会が最も重要視しているという懇親会の始まり。宗谷での研究会に参加したときもそうだった。飲み始めるときには多少の後ろめたさがあったりもするが、今はもうすっかり温泉気分だ。湯船で立ち上がると心地よい寒気が体にあたる。前から一遍やってみたかった露天風呂でのビールも格別。忙しかった1月の代償として与えられ

た休暇のような気持ちになってくる。ようやく懇親会でも知ってる人がふえてきた。そろそろ「つくばからきた佐藤」ではなく「北農試の佐藤」になってきたかな。深夜をまわったのにまだ脱衣場には何人かの人がいる。こっそり持ってきたビール瓶とコップを見つげられてしまったようだ。

札幌よりは冷え込んでいるが、驚くほどには寒くない。高畑先生の予告編（「十勝地方における冬期の家畜管理」、北海道家畜管理研究会報第26号、1990）にあった、そして参加した誰もが期待したであろうマイナス30度の朝はやってこなかった。ともあれ、最近人出不足対策とやらで多くのホテルが採用していて、宿泊客にも評判の悪くない（と思うが）バイキング形式の朝食をおなかにおさめ、日本の乳牛の約1割、肉牛の約4%が飼育されている十勝地方の家畜管理をみに出発。それにしても、あのバイキングの朝食のおかずの半分を夜の宴会料理として出してくれたら、もっとお酒がおいしくたくさん飲めるのに、と思うのは私だけだろうか。漬物とか、塩ざけの切身とか、あれで飲みたかったなあと思っていると、隣の近藤さんは二日酔いぎみ。やっぱり、朝食のおかずを宴会に出さないホテルの方針は間違っていないらしい。

## 野原英雄さんの牧場

息子の幸治さんが概要を説明してくれている。耕地面積が約30ha、経産牛47頭、育成牛43頭

……。これは以前にみたことのあるような情景。そういえば、89年の「寒冷地の農業技術に関する国際シンポジウム」(ISAC)の現地視察のときに一度見学させてもらっている。その時にも感じたが、コンフォトストールに繋がれている牛は皆大きくてきれいだ。十勝中部地区農業改良普及所の方がつくってくださった資料によれば、昭和60年度に6,584kgだった1頭あたり乳量が、平成2年度には8,365kgと5年で約3割も増加している。機械の共同利用による良質粗飼料の低コスト生産、乳牛飼養診断事業への参画、後継者育成のための研修生の受け入れ、ETの導入など積極的な経営をなさっている。

牛舎はかなり棟高の高いマンサードタイプ。マンサードのことをキング式とよぶ人がかなりいるが、キング式とは換気方式のよび名で牛の居住空間と棟部の排気口とをダクトと連結するなどの細工が施されたもの。これについては片山さんが要訳した「牛舎のキング式換気システム」(畜産の研究36巻6号、1982年)に詳しい(実はこれまでにほんとのキング式の牛舎を私は実際にはみたことがない)。2階に上がってみるとロールベールの乾草が4段に積んである。2階の床は鉄骨・鉄筋コンクリートで、鉄骨とエキスパンドメタルとで組んだ傾斜路をトラクターが直接入ってこれるような構造である。地形を利用してこのような構造にしてある牛舎はみたことがあるが、構造物で造ったのはかなり大胆な工夫とっていいだろう。1階の牛の通路には石灰が撒いてある。消毒とすべり止めのためだそう。外の牛が、最近よく見かける地熱を利用した不凍結給水器で水を飲んでいる。牛が飲むのを休んだすきに、牛になめられないようにしながら蓋のボールを押して中の水に手をふれてみる。それほど冷たくない。



写真1. 野原牧場：マンサード牛舎と乾草庫への傾斜路



写真2. 野原牧場：不凍結水槽で水を飲む牛

バスの近くで人だかりがしている。入ってきたときには気が付かなかったが、白いプラスチック容器が10個ばかり伏せてある。飼料用のビンかと思って表側にまわってみると、なんとFRPでできたカーフハッチだ。聞けば米国製でかなり値の張るものだそう。FRPのハッチは国産のものもかなりするが、哺乳ビンと給飼・給水容器のホルダーが付いていて、てっぺんには開度の調節できる排気口まで付いている。一見至れり尽くせりのようであるが、これはちよっといただけない。色が白いのはいいけど日射を透過するみたいで夏は暑そう。子牛はまだ入っていなかったがこれでは窮屈そう。それにスタンダードのハッチに付いている運動場が付いていないし、隔離単飼施設であると同時に、

子牛がハッチの中と外の環境を選んで好きな方  
にすることができるところもカーフハッチのみ  
そなのに。

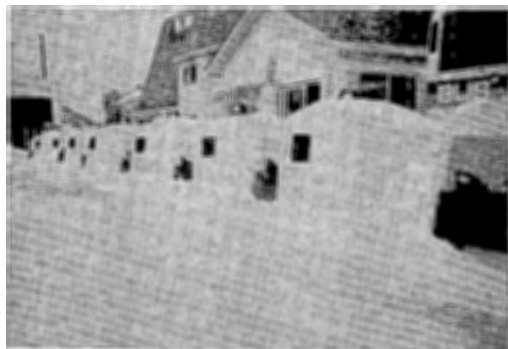


写真3. 野原牧場：ずらりと並んだ  
カーフハッチ

パドックは冬もつかっているみたいなので、  
どの時間帯に牛を外に出すのかと幸治さんにた  
ずねたら、いつもは朝の搾乳の後に出すが今日  
はわれわれのために出さなかったとのこと。お  
世話をかけます。I S A Cのときに西ドイツか  
らきた先生がこのパドックをみて、「暗渠を  
入れたらどうか」といったのに「排水性がおち  
るのは地表面に近いところだから暗渠はあまり  
きかないだろう」とたどたどしく応えたっけ。

#### 末下貞雄さんの牧場

約20haの畑をもつ肉牛牧場だが、畑では小麦  
とスイートコーンを栽培し、飼料の全量を購入  
している肉畑複合経営。素牛、肥育を合わせて  
800頭余りの牛を飼育している。DGが1kgに  
満たない牛は淘汰してしまうとのこと。淘汰率  
約4%、DGの平均は約1.3kg。へい死率は約  
5%で事故と呼吸器系の病気が多いとのこと。

ここには間口7.2m、奥行き約58m、約400  
㎡のパイプハウスの哺育牛舎がある。基礎と土  
間のコンクリート工事を入れて坪当たり5万円だ  
そう。ハウス牛舎の中には子牛用のベンがず

らりと並んでいる。舎内が0度以下になったと  
きには温風暖房機が作動し保温している。側面  
には巻下げカーテンがついている。巻き上げで  
はなく、巻下げなところがいい。カーテンを少  
しだけ開けたいときというのはおおかた寒いと  
きだから、巻き上げでは牛に風があたってしま  
う。畜舎にカーテンをつけるときは巻下げにか  
ぎる。棟部は40cm開放できるようになっていた  
が、つまり、オープンリッジにできるようにな  
っていたが、夏も開けないそうだ。間口7.2m  
のハウスの棟にのぼるのはちょっとたいへん  
だし、それに側面を全部あけてしまえば、リッ  
ジの開閉はあまり換気量に影響しない。夏は屋  
根にシルバーの日除けをつけるそうだ。それか  
ら、先日の大雪を経験したので補強用の間柱を  
準備したとのこと。



写真4. 末下牧場：パイプハウス哺育舎



写真5. 末下牧場：哺育舎内部の子牛



写真6. 末下牧場：哺育舎内部，中央が間柱

十勝中部普及所の元山さんに大雪で近くのパイプハウス牛舎に被害がなかったかきいてみたら、やはりいくつかあって、圧死した牛もいたそう。このところパイプハウス畜舎が道内でもずいぶんと増えているみたいだけど、パイプハウスは雪や風によわいのがいわば宿命的。よわい分だけ安くできると言ってもいいかもしれない。全面にばってん（×）プレースを入れれば少しはつよくなるけど、それでも園芸用そのままのハウスなら何十センチもの雪にはちょっとというところ。早め早めの雪処理に越したことはない。

#### 加藤賢一さんの牧場

そろそろおひる時、パスはあの清川のジンギスカン屋さん白樺の近くにさしかかる。いっそこのまま白樺にいて団体貸切りのお昼ご飯大会にしてくれたらなあ。黍飯に、不思議なくらいうまいたれにつけ込んだ手切り肉。野菜は玉ねぎちょっとだけ……。ああ食べたい（原稿打ってる今も食べたい）。などと不謹慎なことを考えてると、加藤さんの牧場。あれ、ここも前にみたことのある風景。そうそう、おととしの夏東京から片山さんがきたときに、十勝農試のかえりに太田竜太郎さんが連れてきてくれた。そういえばあのときも太田さんに白樺でごちそ

うになって。ああおいしかった。ああ食べたい。

加藤さんの牧場には、馬がいて、がちょうがいて、セントバーナードがいて、さながら小さな動物園。もちろんホルスタインがいて、そしてここにはジャージーがいる。生産調整を機に脂肪率をあげるため、昭和61年に導入したとのこと。64頭の経産牛のうち20頭がジャージーで、5,000kgぐらいだすそう。札幌の生協でもジャージーの乳がはいった4.0牛乳というのを売っているところがあって、飲んでみたけど、うまい。ここにもカーフハッチがあってジャージーの子がかわいい顔で入っている。



写真7. 加藤牧場：カーフハッチにいるジャージーの子牛

ここの牛舎は壁のないフリーストール。側面にも妻面にも壁がない。あまりにオープンなので、おととし来たときには「冬は側面に乾草でも積んで風よけをするんですか。」ときいてしまった。実は前に本州でそうやっている農場をみたことがある。ここではそんなことはしていない。全くいさぎよく全面開放だ。こうゆう牛舎をみるとなぜだかうれしい。

たいへんだなあと思うのは搾乳。27ストールの古い牛舎のパイプラインで搾っている。いわば複列のアプレストパーラー。係留して、搾って、放して、係留して、搾って、放して、つくづくたいへんだなあと思う。「搾乳がずいぶん



写真8. 加藤牧場：壁のないフリーストール牛舎

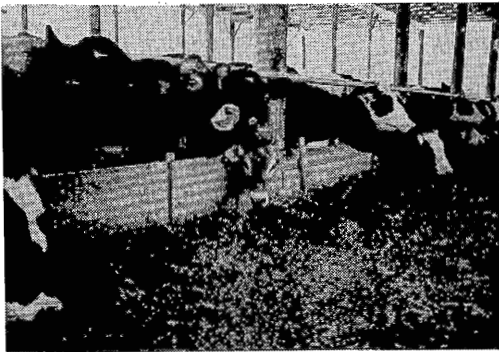


写真9. 加藤牧場：フリーストール牛舎内部

大変じゃないですか。」という誰かの質問に、「運動になって体にいいから。」という加藤さんの答え。この答えにもなんだかうれしくなってしまう。これからもっと頭数を増やす計画だとのこと。

#### 東戸蔦生産組合さんの牧場

「ここ、ここ、ここがさっき話したおいしいジンギスカン屋さん。」と、隣の近藤さんにおしえながら未練を残して中札内の中島農業センターへ。お昼ご飯はボリュームタップリのお弁当、そしてフローズンヨーグルトをごちそうになる。担当の普及員さんが東戸蔦生産組合さんの概要を説明してくれている。おなかもいっぱいになり、ちょうど陽のあたる窓ぎわの席に座

ったのでなんだか少し眠くなってきてしまう。ちゃんと聞いてないと帰ってから報告が書けないじゃないか。

東戸蔦生産組合は4戸共同経営の酪農牧場で有限会社。総頭数475頭、経産牛235頭。約150haの耕地は牧草とデントコーンが中心。牛舎は手作りのものが多い。今もフリーストール牛舎を1棟建てている。建設中の牛舎は柱が古電柱で他の材料も古材が多い。牛床にはタイヤをコンクリートに埋め込んである。ほんとに牛床の材料にはスタンダードがない。土、土とタイヤ、コンクリートに敷料、コンクリートにゴムマット、本州のタイストール牛舎では木の牛床もみたことがある。



写真10. 東戸蔦生産組合：右端の建物がパーラー



写真11. 東戸蔦生産組合：建設中のフリーストール牛舎

ここでの目玉はなんといっても14頭複列の平行パーラー。搾乳牛を2群に分けて早朝・午前・夜の3回搾乳をしてる。1頭当りの乳量は1万kgに近い。パーラーには見学用のスペースも準備されている。ちょうど午後の搾乳の時間。壮観。そしてうれしいのはパーラーとホールディングエリアの外装の色。屋根も壁も真っ白。外からみたら喫茶店かペンションのようにも見える。暑さを防ぐために外装は白がいいのに、なかなか白い牛舎にはおめにかかれない。暑いときに、並んで留めてある白い車と白じゃない車のトランクに（ボンネットはエンジンの熱が伝わってるかもしれないから）べったっと両手の手のひらをいっしょにあててみれば、屋根は白にしようと誰でも思うはずなのに。

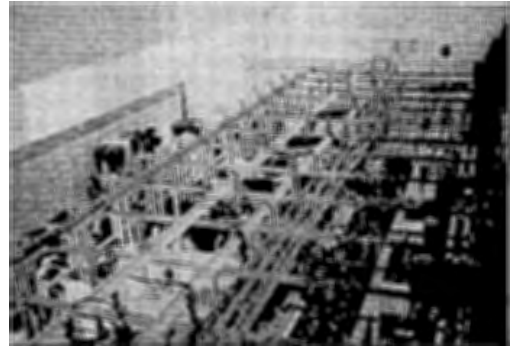


写真12. 東戸鶯生産組合：

平行パーラーの片側

バスが羊ヶ丘についた。列車の中で飲んだ2本のワンカップでほろ酔い気分。からまつの並木を家路にいそぐ。どれも特徴的な牧場だった。牛床だけでなく牧場にもスタンダードはないなあ。施設は管理を補完できないけど、管理は施設を補完できるからかなあう。